

# 娘・母関係の物語（七）

山田 英美

## 第三部（承前）

### 第十六話 そのときの前夜―揺れ動く

#### 親子の二ころ

ミルは、第三部の冒頭に書いたことに直面する年令に達した。いわゆる二分の一人といわれる十歳前後は、自我の育ちからみるとひじょうに興味深い年令である。前思春期に向かう児童期のまっただなか、心身のエネルギーは外の諸々のものとかかわりに向かって活きいきと発散される一方、自分と家族のかかわりや家族のあり方にも客観的な目が向けられて親に向かつてさまざまな批判を突きつけ、矛盾を突いてくる。また自分でもわけのわからない衝動に駆られて不機嫌になったり不安におののいたりする。ミルは秋には満十歳になる四年生だった。

娘が「のびのびと育つこと」を私たちは何よりも優先させて心がけてきたはずだったが、行動の上では「のびのび」していることと「わがまま」は表裏一体になりやすい。私は、娘の「のびのび」の一線を越えるかにもえる部分に苛立ちを感じて、自分の感情をもてあますことが多くなった。あまりの「のびやかさ」にたいするやつかみの心があったのかもしれない。自分の心の育ちの問題がそうさせる反復強迫観念の裏返しだったのだらうと、今はそれがわかる。しかしその時は「心の中の小悪魔」と感じていたものと闘わねばならない日々がしばらく続いた。

昔から日本には、言うことをきかない子に、親が「お前は橋の下から拾ってきた」と言う脅し文句が存在した。暴れん坊がそれで一時ひるんでおとなしくなるといふことをねらった電気ショック的手段である。日本社会の親子の関係は他国に比べて密着的である。

子どものわがままな振舞いに困った場合、「橋の下」の話によって親との間に心理的な隙間を作り、無遠慮な態度につつしみを持たせたいということを企図した親たちの無意識的な知恵ではなかったかと、私は考える。言った親のほうは単なる脅しであることを端から承知しているものだから、そのことで子どもが実存的な不安にさいなまれることになろうなどとは想像もしないことが多い。

最近の大学生にその話をしてみると、意外にも「私も言われた」「母も親から言われたと聞いた」という人が少なくない。現代でもそれは死語になつていないところをみると、日本の親子関係の心理的構造には大きな変化はないと考えられる。日本人に特徴的な「もらいっ子妄想あるいは血のつながりへの偏重の心理」と共通の地盤ではないかと、私は考えてもいる。

さて、われわれの場合、冗談や脅しではないので、もしかしたら、この子の小さな精神を破壊しかねない。なのに……このころの片隅で暴れる悪鬼をどうしたものだろう……。

あと一ヶ月で夏休みという頃、ミルは登校拒否的な行動を現した。確かに夏風邪が長引いていたには違いないのだが、風邪の症状が治つてからも、ふだん活動的な彼女に似合わず、続く二日ほどを家の中でじっとしていた。昼間の大半をひとりしていると、一人ぼっちの感を強くすることにもなる。

勤めから帰ってきて私が、

「早く元気になるうね。」と言つと、

「元気になりたくない！」と口答える。

「おかあさんは、こどもが病気で家に来てくれない。」

「わたしをひとりっ子にして、どうしてきょうだいを産んでくれないの！」

この二つの問題は、私にとつてどうすることもできない難問である。反抗期の子どもは、親が困ることを見抜いているように迫ってくるものである。この子を我々のところに迎えたのは、大人のエゴのなせるところに過ぎなかつたのだろうか？ 少なくともそうではない部分もあるはずだ、そう信じたいと思いつつも、自分の不明を嘆かずにはおれなかつた。私にとつてどうしようもないこの二つの問題についてどう説明したら納得してくれるのだろうか。

「もつと甘えたい？」ときくと、ミルは笑いながら

「それもある。」と、答えていた。ぐずぐずしたやり取りがあつた後、

「ミルはいないほうがいい？ 死んだほうがまし？」と、自分でも涙ぐみながらつぶやくにいたつて、私の心の堰は、ついに破れてしまつた。子どもは「死」について何も知らないからこそ軽々しく口にするのだが、一人の人の「死」によつて残される者にどんなことを招来するか、まして子どもが幼いほど受けるダメージの大きさ……そんなことにあまりに無知な子どもの単なる駄々として見過ごすことができないほどに、私の気持ちは激昂していった……。

じつは例の悪鬼は、このところなりを鎮めてひとところほどは暴れなくなっていたのに、皮肉なものである。夫が留守の間に私だけが告げてしまったいいのかな？という点が気がかりになりながら、ミルを産んだお母さんは、赤ちゃんの顔も見ないうちにすぐに亡くなったことを話した有様が、第三部の冒頭の部分である。

さらに付け加えると、それに続く彼女の激しい行動に呆然とする事がいろいろあった。ぱつと起き上がって自分の机がある部屋に駆け込んで、どうするのかと思えば、アルバムを一冊抱えて猛然と戻ってきた。そして最初のページをひらき、「じゃ、この赤ちゃんはいたい誰なのよ?!」と、生後一カ月の赤ん坊の写真を突きつけた。T県のU乳児院で写してくれていた、たった一枚きりの、何かに向かって笑っているような横顔の、小さな写真である。ミルの無邪気な発想に心底ほっとした私は、

「これは、真正正銘のミルです。かわいい赤ちゃんでしょう。」と答えながら、一枚の写真の重みに感謝した。これのおかげで、この子は大地から足元をもぎ取られることはないのではなからうか、少なくともこの世に生まれたことを証しするものとして。

その日は、いろんなことを話し合った。彼女は「赤ちゃんのわたしを、U市からN市へつれていったのは誰だったのか。」とか

「産んでくれたお母さんのお墓はどこにあるのか。」とか

「ほかに赤ちゃんがいたはずなのに、どうしてママとパパはミル

を選んだのか。」というようなことを立て続けにきいてきた。

「それは運命だね。あるいは神様のお恵みだね。ママたちにとって、ミルにとつても。そう思わない？」がanganする頭痛状態で会話したことだが、私は不思議と鮮明に記憶している。

ミルには、これは「秘密」ではない、あなたの「宝物」なんだから、大事にするようにということも付け加えた。宝物は人に見せびらかしたりすると壊されたり盗られたりすることもあるでしょう、だからあまり見せびらかさないほうがよいと思う、というようなことも。

突然とつもない宝物を持った心の高揚のゆえか、翌朝、「今日は学校へいく。」と自分で身支度をし、誘いに来てくれた仲よしの友だちをいったん待たせておいて、

「あのことSちゃんに言っちゃいけない？」などと、自分を抑えるのが大変なくらいの様子だったが、

「言わないでおく。」と真顔になって、元気に出かけた。

帰宅後、

「先生（受け持ちの女性の）に、放課後、誰もいないところでお母さんのことお話ししたの。だって先生はミルにとってだ〜いじな人なんだよ。」と告げたのだった。

## 第十七話 ふたたびの不登校―そして癒し

ややあつて、私が出張で何日か不在となったある日、ふたたび登校しぶりの傾向がでてきたという。顔色が優れず暗い表情で、ついに玄関の上がりがまにすわりこんでしまったらしい。すでに学校がはじまる時刻が過ぎても動こうとしなかった。

以下は、父親である夫から詳しく聞いたそのときの様子である。

彼は、膝を抱えているその子のそばに寄り添い、

「ミルは小さい頃から、いろいろたいへんだったよな。」とゆつくりと言葉をかけるも、多くは語らず、ほんとうにミルの気持ちと重なり合う、共感のときをもった、と言う。自分にとって生涯忘れられないその「とき」だったと。娘の小さな肩をただじつとだいてやった。しばらくして、立ち上がったミルは、

「学校に行く。」と、かばんを持って、自分からドアを開けた。もう始まっているからついていってあげようか、という父の申し出も、「いい。だいじょうぶ。」と断って、アパートの階段を降り、小走りに学校への道をすすんだ。父は、そのか細い後姿が、小道に沿って続く塀の角を右へ曲がって消えるまで、たたずんで見送った…。

ミルはそれ以後、学校生活では二度と、不登校におちいることは

なかった。

## 第十八話 先輩のカウンセラー 古屋健治先生の手紙

私は、カウンセリングあるいはスーパー・ヴィジョンを受ける代わりのように、古屋健治先生に手紙を書くことがあった。夫は先生と大学で同じ研究室に所属していたので、何かとよく話をする機会があった。娘とのそのときのことについて、事実を中心に、私は長い手紙を書いた。それに対し先生からいただいた二通の肉筆の返信から抜粋してここに転載させていただき\*、この出来事の整理をしたいと思う。

(\*掲載に関しては許可を得ている。なお波線とへ内は筆者の記入である)

お手紙を拝読しました

子どもが成長するにつれて 次々と 新しい課題が生じてくるものですね。むしろ人生とは 新しい課題との出会いの連続だと考えるべきなのでしょうか。(中略)

ミルちゃんは、認識力も 感受性も すぐれた子どもさんと思受けられますので、成長のジグザグも大きいかもしれませんね。しかし 中核の健全さが(私には) 見えますので お母さんの心とミ

ルちゃんの心のつながりを 信頼してよい というのが私の直観です。

分離不安は一体化願望がある限り 機会さえあれば 何回も何回も再現するもの、と思います。(この点につき ミルちゃんが過敏と私は思いません。むしろ表現的なのだと思えます。そのほうが、そのつど処理可能ですから、永い目で見ると良いことだと、私は考えます。表現的でない子は、あとあとまで傷あとが残り、処理困難になりやすいと 考えます) 誰でもなかなか越えにくいものと思えます。多分、分離不安を基本的に克服できるのは、青年期終了のときではないでしょうか。(私は 異常に晩成のため つい近頃 それを乗り越えたような気がしておる次第です)

また 自分が一人ぼっちだという感じは 誰でも何回か感じるものだ その気持ちは 他人を愛する気持ちへとつながっていく気持ちなのだから 大切にしないさ いというような意味のことを 私はいつだったか 息子に話したことがあります。どんな言葉で話したか 思い出せませんが、小学生の頃の彼に わかったらしかったです。

もうひとつ これはYR先生(筆者の夫のこと)から聞いた話かと思いますが、

「お父さんとお母さんは もとは他人だ。しかしお互いに大事な人と思いついて仲良く暮らしてゆきたいと思っている。それと 동시에ミルと私も いつまでもいつしよに仲良く暮らしてゆきたいと

思う。ミルは 私の大切なかわいい子だからね。」……たしか、R先生は以前に、いずれ 娘に事情を話すときがきたら、そんな風に話すつもりだというようなことを 言われたことがあったと 記憶しますが。(後略)

## 二信

火曜日にYR先生から 直接お話を聞かせて頂いたあと H先生(筆者のこと)のお手紙を 読み返してみても 再び これをしたためません。

前便の時は 私自身一種のショックを感じていて とにかく 何がお返事を書きたくて、とりとめなく 書きつらねたと思います。が、今は かなり落ち着きましたので、前便よりは おわかり頂きやすく書けるか と思います。(中略)

H先生は 必死の状況の中で、思いがけなく 大人並に人生の秘儀をつかんで行くミルちゃんの 主体自我を のぞき見たのだ、と思えます。

私は、内心、心理療法という言葉が 好きではないのですが、ブレイセラピーでも 重大な転機の瞬間には 子どもとセラピスト(大人としての私)の区別は 吹きとんで まるで対等の 個人と個人との対決と出会い、という感じ(嵐とその直後の平安)であり、どちらがセラピストかわからないものだ、と思います。こちららも重大なことを学び、あちらも飛躍的に成長する、のですね。

R先生には、ミルちゃんがお母さんと お父さんとに一人ずつ 出会えたことは 全くラッキーでしたね、と申しあげました。(三人場面では、多分：難しくなったかもしれないと 思うからです) H先生からお手紙で R先生からは直接に ミルちゃんの出来事をお伝えいただいたことは 私として 感謝にたえません。貴重な人生の一場面に 直接触れさせていただき、大変 学ばせていただいた、と思っております。

このようなお手紙などに支えられ、私もようやく平常心をとりもどしてからは、娘とは新しく同盟結社に似た親子関係を築いていた気がしていた。しかし：

「宝物」の中身を見てしまった娘にとつては、パンドラの箱を開けたように、何かにつけて「ほんとうはどうなのか」という疑念や不安が意識にのぼっても仕方のないことだったろう。私の何気ないふるまいや言ったことに過敏に反応することもあり、そのことで二人が衝突することも少なくなかった。

「人生初期の頃の環境が、君の場合とは全然違うんだから、もつと手当てをしてやって。」と、私の娘に対する態度を、夫から注意されるのが時々あった。ミルは五歳くらいから、自分の願うことや不安感を必死になって表現して相手に伝えようとし、たとえば一体化の願望などは、全身から搾り出すような濃厚な様相をみせた。そんなことを夫に話すと、彼は私に忠告したものである。

「患者さんが分析できそうなことをいっばい話してくれるとカウンセラーは喜ぶが、実はそのとき、相手は危険な状態にあるんだよ。ミルも危険だ。もつとかわいがつてやらないと」と。注意されるつど、そういう問題こそを私は自分のテーマにしてきたのではなかったか、と、げんなりし、内心恥じ入ることであった。

## 第十九話 はじめて海外自然スクールに出す

夏休みに入つてすぐに、海外でおこなわれる二週間の自然スクールに参加させることになつていた。このことはだいぶ前から決めてあつたのだが、土壇場になつて「行かない」と言い出すかもしれないという、一抹の懸念がなくなかつた。それも受け止めねばならないと覚悟はしていた。分離不安の根深さを私なりに理解しているつもりだったからである。しかしミル自身は、淡々と持ちもののリストを作つて自分でチェックをしたりしており、不安が特に高じる様子はなかつた。

出発の当日、空港まで送つていく電車の中で、ふたりだけの向かい合つた座席からミルがやおら起立し、

「おかあさん、うたうよ。」と小声ではあるがまじめな表情で歌いはじめたのは、「おじいさんの時計」だった。

おじいさんが 生まれた朝に 買って来た時計さー

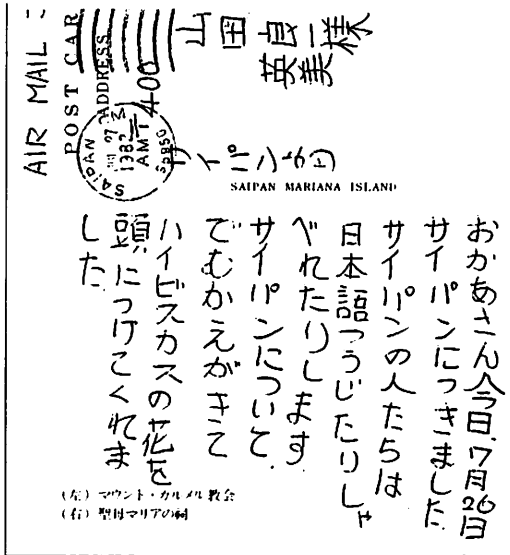
百年間 チクタク チクタク

おじいさんといっしょに チクタク チクタク

今は もう…

この際この歌の象徴するものは何かなどと、へたな解釈はやめておこう、すてきなプレゼント！すばらしい子ども！元気でいっておいで。と、胸が熱くなるに任せ、古屋先生が言われるように子ども「中核の健全さ」を信じてよいことを実感していた。

左は、キャンプ地への到着を知らせた彼女の絵葉書文である。この二週間を持ちこたえた体験が、その後、一人で旅をしたり、留学したりしたときの「耐えられる基準」になった、と述懐するのを聞いたことがある。



## 第二十話 ミル語録

ミルは、何かにつけ自分の気持ちを書き表した。まさに「表現的」である。心にとまると、私はカードやノートにメモしていたので、それらから娘・母関係に関わるものを拾ってみる。

「わたしからおかあさんがどんどん離れていくみたい」

「もうちょっとだけわたしといっしょにいて」

「おかあさん泣いちゃだめ。おかあさんがいっしょに泣いたりして早く立ち直ってくれないから、学校に遅れるじゃない」

「(学校に) ついていってもらっちゃ、恥だから」

「わたしはバカで トンマで オロカです。だから二階へいっしょに行つてえ！」

私「バカで グズで ノロマなカメです？」

「うん、でもノロマじゃないよ、グズじゃないよ。ねえおねがい！ マミー！」(と迫る)

「おかあさんは おとうさんじゃない！」(見抜く母親、理屈っぽく評価する母親への抗議)

「うん、ママがやさしいと、もつとしあわせ」(母親は単純でやさしいこと。これに尽きる…)

「ママが『五時に帰る』って言つていて、五時に帰らないことが多

いでしょ、そういうときもミルはすこく、すつこく心配するの」

「二人（父母）はケンカしないだね。テレビでやっているようなこと（親の離婚）になったら…わたしは、どうしたらよいかわからない。わたしはお父さんたちにいちど死なれているんだからね…」（一氣に言っつてふわつと涙ぐむ）

「\*ちゃんたら、まだローリースケートしたりして外で遊んでいけるけど、わたしちつとも遊びたいという気がしなくなったサ、やっぱりおとなになってきたずらかと思う」（H県の祖母の家へ一人で旅して帰ってきたとき。みごとな甲州弁！）

## 第二十一話 六年生のころの「コマ

小学校高学年期の発達のエピソードは、たくさんあつて際限なくくらいである。そんな中で、出生地に関してちよつとこだわった出来事があつた。また生きものとの直接の関わりを求めるようになっていゝる。そんな事例をとりあげたい。

### ・出生地についての発表

担任の先生が休まれて代わりに先生が教えに来てくださった授業のことを、帰ってきてから話す。

「社会科の勉強で、「山梨県以外で生まれた人は？」と尋ねられた。

わたしはそのときT県って言わないで別のところにしたの。おこあ

さんどう思う？」

私「ふーん。N市にしたの？」

「ううん。H県のおばあちゃんにした。だってT県には赤ちゃんのときいただけで、眠ってばかりでちつとも知らないんだもの。」

私「そりゃそうだね。おばあちゃんちのあるH県ならみんなにどんなところか話してあげられるものね、社会科の時間だし。そういう機転が利くつてことはすこくいいことよ。」

「でも学校の生活環境調書に書いてあるのと違っていたら変に思われないかしら？」

私「平気よ、先生はそんな大勢のこと憶えてないよ。」

「大勢でもないよ、五人くらい。友だちが「へえー、遠いところで生れたんだなあ。」つて。」

私「教頭先生がミルのことを「そのフランス人」とかつて呼ぶそうだから、「フランスです」つて言つてやれば。」（茶化す）

### ・ひよこ

ゆうがた、バレエの稽古が終わる頃に迎えに行った。夕立が激しいさなか、友だちとレオタードのまま車に飛び乗つてきて、開口一

番、

「おこあさん、おこらないで、おこらないで。」怒られるようなことをしたときに張る予防線である。

「きょう、I高祭があつて、お習字（塾）に行かなかつた。それが



ら、(「高祭で)ひよこ売ってたから、買っちゃった…。」以前にも地域の祭りで羽に色を塗られたひよこを買って、いろいろあり、懲りたかと思っていたのに：啞然としてしばしものが言えないでいたが、相手が予想したであろう御託(かわいいからって衝動的に買っちゃって。アパートなのにどこで飼うの、生き物なんだよ、先のことまで考えなさいとか)を一通り述べた後、「一羽でしようね？」と後部座席を振り返ると、「二羽：。」と小声で答える。そして「ニワトリっていうくらいだもの：。」と変な理屈を加える。

その夜、狭いベランダに置いた段ボール箱の中で、ちいさなひよこたちは二羽で重なり合って眠っている。やっぱり、あたたかい母鶏の羽の中で眠るかわりに身を寄せ合う必要があるのか…。

父親が帰ってきて、

「やあ、ヘンな鳴き声をする、またやったな。もう焼き鳥だ。」とまぜ返す。それでいて、餌や暖房のことなどの注意を与えている。娘と餌を買いに行ったとき、街のペット屋のおばさんは、「こういうのって、死んでも困る、大きくなっても困るんだよね…。」と、客との間でそういう経験がよくあるのか、共感的なことを言ってくれて、なんだかほっとした。

#### ・犬のシロ

アパートの前庭に、首輪のない白い雌犬がよく姿を見せるようになっていた。性格のおとなしい上品な犬で、アパートの子どもたち

は「シロ」となづけて餌を運んでやったり何かと関わるようになって人気者でさえあったが、中には恐がりの子どももいてシロが近くであくびをしたら、噛まれると思ったのか大泣きした。そんなこんなで、住民会議まで開かれて、追い払われることになった。もちろんミルなどは、とてもがっかりしていたが、ある時、シロが子犬を数匹連れてアパートにやってきた。「こどもを見せに来たんだ！」と再び大騒ぎになった。

しかしその後また姿が見えなくなり、野犬駆除のために毒餌を撒いたという町内放送もあつたりして気になっていたが、初秋のある日、シロは前庭に停めてあつた自動車の列の下で横たわっていたのだった。かわいいそうにきつと毒餌を食べたんだね、このアパートまでたどりついてここで死んだんだ、この場所で子どもたちにも愛がられた記憶があつたんだね、などと、私もいっしょにシロの死を悼んだ。通りがかりの女子高生が白いフランス菊の花を摘んできて遺骸のそばにたむけてやっていた。

#### ・犬のこころ—ミルの創作話

あるとき 犬としゃべれる男が犬と出会いました。男は犬を家につれて帰りました。男は犬としゃべれても 犬のこころを理解することはできませんでした。

犬は野良犬の親で ほんとはとても帰りたいかったです。でも男は 犬が散歩に行きたいのかと思うだけでした。

そんなある日 犬が病氣になりました。男は病院に連れていきましたが 原因がわかりません。そこで男は犬がもといいた場所に関連して行ってみました。すると仲間が林の中から出てきました。

とたんに 犬の病氣はすつとんでしまいました。男はやつと ところがわかり犬を放してやつたつて。犬としゃべれても 犬のところがわからなきやダメね。おわり

シロが死んでから、ミルは、犬を飼いたいときりに言うようになっていた。それには一軒家に引越さなければならぬ。親が躊躇していると、今すぐほしいの。中学や高校になつてからじゃそんなにほしくない。今わたしには必要なの。と主張するので、重い腰を上げて、家探しを始めたが、結局、あまり遠くない場所に新しく建てることになつて、急ピッチで工事が進み、小学校の卒業までに引越した。雑種の犬が家族に加つたのは、言うまでもない。

### 補遺

この時から三十年近い歳月が流れ、私達の家族にも大きな変化があった。ミルがアメリカの大学を卒業した年の冬に、娘を熱愛した父親が病で他界した。彼女は大学院への進学も考えていたが、まず結婚して子どもを育てた後にまた勉強の機会もあろうからと、翌年クラスメートと国際結婚した。海のあちらとこちらの不安定な生活

が始まつて子どもも授かつたが、難しいことも多々あつて結局新しい家族を堅固に発展させられないまま別々になり、母子は私の近くに住み続けることになつてしまつてゐる。

ひとり息子のRが十歳になる年のある日の会話を拾つたメモが見つかつた。最後に、そのごく一部を添えて稿を結びたい。

ミ「子どもも親もお互いを選んで生まれてこられないつていうけど……」と言いかけたところへ、子どもが引継ぎ、

R「そう、神さまが決めてくださった。」

ミ「でも、おかあさんは私を選んだんだから……」

R「神さまでしょ！ ママが言うようだったら、おばあちゃん、神さまつてことになる！」

やつぱり、ミルには拙稿の(五)と(七)を読んでもらおう。娘もまたこの母との縁を望んだということがわかるはず。そしてRの言の正しさは、互いの願いをきき届けてかけがえのない家族にしてください、大いなる方の慈愛の働きを感じることで、納得できるだろう。

(第三部了)

〈キー・ワード〉

分離不安

主体的自我

表現的